

## 教育相談キャリアアップフィールド

### 教育相談の事例検討

学校教育専修 鈴木 壯

17年度の10年経験者教員研修は「教育相談の事例検討」というテーマで実施した。研修教員には、関わっている児童生徒の相談事例や指導事例の概要とその相談の逐語録を報告してもらった。その報告された事例について、受講者全員が各自で感じたことや考えたことを述べ、討議し、その後、筆者がコメントした。事例を検討することによって、児童生徒の問題の理解の仕方、彼らとの関係の取り方、話の聴き方、相談の方法等を学ぶことを第一の目的とした。これは、研修教員自身の心理的課題にも触れ、自分自身を振り返ることにもつながることである。

受講した教員（3名）はいずれも担任、あるいは相談担当者として教育相談に関わっている教員であった。

研修の一日目の午前は、カウンセリングや心理療法について講義をし、その目的や具体的な方法について理解を深めた。研修教員はカウンセラーではないが、カウンセリングや心理療法の基本的な理論や方法を知ることが教育相談を行う上で欠かせないことであると考えたからである。

午後は、研修教員が関わった生徒の概要、ある一日の具体的な関わりの様子の記録（逐語録）を報告してもらい、その後討議し、コメントした。これは、カウンセリングにおけるスーパービジョン（supervision）をイメージして実施したものである。スーパービジョンとは初心者が専門家として一人立ちしていくために欠かせない訓練法のひとつである。カウンセラーの訓練においてそれが必須のこととされている。スーパービジョンは「付き添いのおとなが、子どもに事故が起こらないように適切に目的地に向かって誘導すること」（西園，1994）、「優位、つまり、superな位置から眺める、つまり vision、ことであるが、自分より上の人にもてらうということ以外に、自分を一步はなれたより上の広い位置から眺めなおすというニュアンスもある」（渡辺，1994）、ということである。つまり、熟練者（スーパーバイザー）が未熟な者（スーパーバイジー）に問題となっている人の理解の仕方、支援の具体的方法、その過程での介入の仕方等について指導助言すると共に、広い見地から共に眺めてみる、ということを行い、スーパーバイジーの相談者としての器量を向上させることを目指すものである。今回の研修教員はスーパーバイジーの立場になっていたことになる。

研修の五日目には、一日目の研修で学んだことを活かしながら問題となっている生徒とどのように関わったかについて具体的な関わりの様子（逐語録）を報告してもらい、一日目と同様の討議をし、コメントした。

大学での対面での研修の2回とも、生徒とのやり取りをテープ録音に頼らずに、面接の終了後に記憶を辿って記録したもの（逐語録）を報告してもらった。それは非常にエネルギーの必要な

仕事である。大学での研修の前にそれをするだけでも、自分自身の話し方、話しの聴き方、こころの動きを振り返ることになる。そのことも今回の研修で目論んだことである。対面で事例を報告するときには、他者からのコメントを聞くことで、さらに自分自身のことを振り返ることになったであろう。そして、このようなことを繰り返すことによって相談者としても器量を向上させて行くであろう。

以下では、問題となっている生徒への支援についての事例報告とその討議の概要を2事例挙げる。なお、事例は匿名性に配慮した記述となっている。

## 教育相談の事例検討の例

### 1. 教師 A の不登校傾向生徒への対応事例

欠席が多くなり、進級が危ぶまれたことから、その支援のために教師として関わった生徒の事例であった。問題となっている生徒は、コミュニケーションが円滑でない家族で育っていること、学校内に友達がないこと、ゲーム・ネットに熱中していることなどの特徴を持っていて、人間関係をスムーズに行うことができにくい生徒であると考えられた。研修教員がその生徒と関わろうとしても、本人自身から話しをすることが極端に少ないため、待ちきれずに、研修教員の側から「…はどうだ?」「何か考えていることはあるか?」などと働きかけていた。そして、そのときにその生徒はあまり返答することがなく、無言でうなづくことがほとんどであり、教師としてどのように関わるのが良いのか困っていた。このような生徒との応答の逐語録を報告してもらった後、事実確認や教員の言葉の意図等を確認し、討議の後、次のようなコメントをした。

このような生徒の生育歴上の背景を考えると、話をしてもそれを受け取ってもらえない状況で育ってきたことが考えられ、そういった生徒に相談者側からさまざまに働きかけても、なかなか応答できないから問題となっているのであり、その生徒自身もどのようにしていいのかわからないときが多い。そういうときには、教員はその生徒にとって信頼して話しの出来る人であるということを生徒自身から了解してもらうことがまず第一に必要なことである。それには、時間や場所を限定して会った方が良い。限定した方が自分は守られているという安心感が得られやすいからである。等のコメントをした。一回目の研修によって2回目の逐語録のなかに、教師の生徒への対応が大きく変化したことが表れたわけではないが、変えるためのきっかけにはなったと考えられる。

このような生徒への関わりでは、相談を受ける教師はまず問題となっている生徒がそういった問題を発生させざるを得なくなった背景を理解しなければならない。そのことは本人自身が理解しているわけではないので、その理解はそれほど簡単にできることではない。本人が自分の問題を理解しているならば、それへの対応を考えるだけで済むので、そのときはそれほどたいへんなことではない。じっくり話を聴きながら本人すら意識に上っていないことを読み取り、共感的に理解して行くと、徐々に生徒の問題の背景が理解できるようになる。そのときには同時に、生徒も自分自身の問題を理解できるようになるはずである。そうすると、生徒は自分の話していることを受け止めてくれる人がいることを知り、そういう人（教師）の前では自分自身の内面を表現できるようになる。そういったことをしながら徐々に彼らは成長してくはずである。しかし、このような過程は相談を受ける側にも、相談する側にも大きなエネルギーの必要なことであり、

短期間で済むようなことではない。

## 2. 教師 B の心理的問題を抱えた生徒への対応事例

親との関係の悪さが問題の背景にあり、将来に強い不安を抱えている生徒の事例であった。初めは学業成績不振や服装の乱れについて指導するために面接をしたのであったが、その後に、その生徒が自分自身のことを語り始め、相談に応じるようになっていた。

その相談では、具体的な状況について十分に聞き取れていない、生徒の側に立つ姿勢が十分でないなどが感じられた。たとえば、生徒が「ときどき死にたくなる」と語ったのに対して、研修教員が「つらかったね」と応じていた。表面上は生徒を尊重した対応であった。しかし、「死にたくなる」という具体的な状況を教師が理解し、その中で生きている生徒の感情を感じとっているかということ、そうではなく表面上の言葉に反応して応答していた。こういうときには生徒のこころを共感的に理解したり、受容したりすることは難しくなる。そういった理解が表面上でとどまることが生徒との言葉のやり取りの中に数回あり、そのときの話の聴き方についてアドバイスした。つまり、どういうときに、誰と、どこで、何を話したかということ具体的に聴き、自分自身もそこに居て生徒と同様の感情をリアルにイメージできることが大切である、と。それを指摘された後の教師の生徒への対応では、生徒の側に立って行こうという姿勢が見られた。しかし、問題の根が深く、すぐに解決することは難しく、その後もその悩みに付き合っていくことが必要な事例であった。今後少なくとも在学中は、問題の解決を急ぐよりもじっくりとつきあっていくことが期待された。

## おわりに

2回の対面での研修によって生徒指導や教育相談での話しの聴き方や対応の仕方がすぐに変えられるわけではない。変えるためには、人の話を聴くときや人に話をするときの自分自身の問題（つまり、課題）をまず自覚し、その上で成長を求め続けることが必要である。それがあって初めて相談者としての成長が期待できる。しかし、それは簡単なことではなくそれ相応のエネルギーの必要なことである。今回の研修がそのきっかけになることを願っている。3名の研修教員とも、今後そのような大変な仕事を遂行していくことであろう。

## 文献

西園昌久 (1994) : スーパービジョン論、精神療法、20-2: 3-10

渡辺久子 (1994) : スーパービジョンのジレンマ、精神療法、20-2: 27-31

## 配布資料

### ○12年目研修の内容・目的

- ・相談事例，指導事例の詳細を報告する。
- ・その事例を検討する。
- ・児童生徒の話をどのように聴くか，彼らをどのように理解するか，彼らとどのように関るか，などを学ぶ。
- ・自分自身についての理解を深める。

### 1. カウンセリング（心理療法）とは？

「悩みや問題の解決のために来談した人に対して，専門的な訓練を受けた者が，主として心理的な接近法によって，可能な限り来談者の全存在に対する配慮をもちつつ，来談者が人生の過程を発見的に歩むのを援助すること」（河合，1992）。「心理的な問題で悩んでいる人に対して，心理的な知見から接近して，クライアントが解決していくのを共にする過程」（岡田，1994）。

カウンセリング（心理療法）では，来談者の悩みや問題の原因を発見し，それらの除去や弱体化によってではなく，自己成熟過程を促進することによって，解決・治療を期待しようとする。悩みや苦しみは成長欲求の表われであり，また，何らかの可能性があるので悩み苦しむと考え，その成長欲求や可能性を引き出すように支援をする。

### 2. 相談を受けた時に起こりうる応答例，そこから考えられることの例。

- ・答えを出さないといけない。原因を探す。→ 正解があるわけではない。原因はわからない。これからどのように課題を解決して行くかという態度で。
- ・助けてあげよう。かわいそうだ。→ 助けてあげられるかどうか。同情は禁物。乗り越えていかねばならないのは本人。かわいそうと思う気持ちは現状維持を肯定する立場。
- ・指導・アドバイスをする。諭す。→ 指導やアドバイスで済むなら相談に来なくてもいい。人生相談ではない。
- ・先まわりする。話を十分聞かずに理解したと思う。→ 来談者の立場に立てなくなる。
- ・周りに働きかける。→ 来談者は自分自身で乗り越えねばならない。
- ・考え過ぎ，考えても無駄。→ どんなことでも本人にとっては意味のあること。
- ・励ます。→ これまで頑張ってきた人が来談する。

### 3. 課題図書

- ・河合隼雄 「臨床教育学入門」 岩波書店
- ・河合隼雄 「河合隼雄のカウンセリング入門」 岩波書店

### 参考図書

- ・成田善弘 「精神療法家の仕事」 金剛出版